
きのう見た夢

吉田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きのう見た夢

【Nコード】

N5451P

【作者名】

吉田

【あらすじ】

組織からひたすら逃げる話。

（前書き）

きのう見た夢を文章にしてみただけなので特にこれといった意味は含まれていません。
さらっと読んでいただけたら幸いです。

男の名前を知らない。

男の隣には幼馴染を名乗る女の子がひとり、迎えを待っていた。
車の多い駅前である。

女の子は言った。

「あなたの親が悪い人かどうかなんてわからないじゃない。」

「そうかな」

「あなたの親は立派な人よ。」

「うん、たしかに。けれどあの人は」

男はそこで何かを言おうとしてまた考えようとした。

「何度考えても同じよ。あなたの親は今まであなたと付き合ってきたなかで、何度もお会いしたことはあるけど、とても悪い人には見えなかった。」

「そうかな。君の親は迎えに来てくれるけど、僕の親は、今日の朝お願いしたんだけど来ないかもしれない」

「疑心暗鬼ね……もう行くわ」

女の子はそう言うと、ブルーの小さな車のほうへと走って行った。

男はそれをぼんやりと眺めて、目を伏せた。

「僕は周りの人間が怖いのもかもしれない」

車が目の前を通った。通行人がぎゅうぎゅうになりながらも人を押し
しのけ歩いていく。

男は目をひらき、コンビニへと歩いていく。

歩きながら考える。

古い洋館。そこにいる何人もの子供のこと。皆、一様に疲れきつ
た顔をならべ、壁に掛けられた絵からは絵の具が垂れている。とて

も温度が熱い。

「最近いるんだよ」

大人の声がしてハッと我に返る。一瞬、無意識に手に取っていた雑誌を落としそうになった。大人の声に耳を傾ける。

「知ってるか？空想科学研究会っていう組織。今朝ニュースになった。」

「ああ、あれか。裏で何か危ないことをしているらしいな。」

「俺この間、見ちまつたんだよ」

そこで大人が声をひそめる。

「ニュースに出てたやつ顔だ。そいつの顔とおんなじ顔をした奴が、警察署の前をうろついてたのを。」

「本当か？」

「ああ。」

「だとしたら、警察も危ないな」

「どういう意味だ？」

「今朝のニュース。空想科学研究会の顔を公開した報道関係の奴らが失踪したって話だ」

「なんだと？どういうことだ」

「おそらくその警察署に今拘留されているんじゃないか」

大人はそこでさらに声を小さくした。

「みんな知ってる話だが、誰一人としてニュースでその報道を見たことがない。警察の奴らが報道規制をかけたにちがいないよ」

二人は息をひそめた。それから周りの視線を感じながら、さっそうとコンビニから去って行った。

男は新聞を見る。今朝の新聞だ。表紙にでかかど七人の顔写真。今の話はどうかやら本

当のようだ。けれど、ここだけこの新聞が残っているのは何故だ？

考えると同時に大きな音がした。驚いて振り返る。

飛び散るガラス。黒い車が突っ込んで、棚にぶつかった。誰かが悲鳴をあげて、何人かの人々がそれと同時に店の外へと走って行った。無事に立って入れることのできた人間だけが、茫然と店内に立ち尽くした。

男は車に乗っている四人のうちの一人に目を向けた。それから、新聞の七枚の写真を順に確認してゆく。

ひとり、ふたり、さんにん…ああ、こいつだ。

そう思っ、顔をあげもついちど確認しようとしたところで目があつた。相手はこちらを見て怖い顔をして、こう言った。

「あいつだ！つかまえる！」

何が何だか分からず、けれども一瞬のうちに全身の血の気が引いていくような気がしてバっと外に飛び出した。

駅はとても散らかっている。無規則に止められた車たちに逃げ道を邪魔された。先ほど目のあつた男。髪を短く切りそろえて、きちんとした身なりをしていた。空想科学研究会のリーダーだろうか。逃げる足を速めながらふと考える。

「追えっ！」

トーンの低い声が響く。それと同時に駅の周辺にいた何人かの人間が一斉にこちらへ向かってきた。

ざっと20人ほどだろう。これでは逃げきれないかもしれない。すばやく動いて、紺色をした車のなかに身を隠す。

遠くのほうでたくさんの足音が聞こえる。

「奴を見つけたら俺を呼べ。奴は俺の手で捕まえる」

座席の下に身を縮める。手のひらを見ると、血が流れていた。ああ、

さつき逃げるときにガラスの破片で手を切ったんだと思い返した。

ここ1週間、何もなくて。

とても平和な日々だったのに。また逆戻りか。

せつかく、組織を抜け出したのに、もっとひどいことになったような気がする。

落ち着いて暮したい。

まっとうな生活をして、まっとうな会社に入って、まっとうに結婚して、まっとうに人生を終わりたい。

まっとうな人生って何だろう。

記憶が現れたり、消えたりすることに何の意味があるのだろうか。

自分の脳に問いかけた。

流れた血をにぎりしめる。

「ああ、」

絶望息で息を吐く。このまま、酸素を吸うことをやめれば死ぬのだろうか。けれど、それはおそらくこの体が許さないだろう。

「おい。やすんでんじゃねえ」

嫌な声がした。

耳をふさぎたい衝動にかられながら顔をゆっくりと上げる。

奴だ。窓の向こうに立っていた。

「お前は何度逃げれば気が済むんだ」
眼で睨んだ。

「ふん。そんな疲れ切った目で睨まれても、痛くもかゆくもないんだがね」

時間稼ぎがしたい。

「なにしにきた？」

「そんなの聞かなくてもわかんた。お前のお父上の命令なんでね」
「あいつの言うこと聞くななんて君らしくもない」

「しかたがないだろ。俺は逆らうわけにもいかないからな」

「君はもつと聡明な奴だと思ってた。…今では君の声を聞くだけで虫唾が走る。」

目を伏せる寸前、奴の顔が視界に入る。先ほどの余裕な表情と打って変わって、恐ろしいほど無表情だった。

奴の表情を知っているような気がして頭のなかを探ってみた。けれど、それも無意味だ。また記憶が消えかかっている。ああこれは誰だったか。何故こんな奴に追われているのだろう。

「おい、なんか言えよ」

声のほうを振り向いた。おそらく顔には恐怖の色が出ていただろう。
「なんだ？ そんな顔しても逃がしてやらんからな。お前は今、俺を怒らせたんだから」

奴がしゃべる。何を言っているのだろう。よく理解できなかった。

「…おい、その顔をやめろ、なんでそんな顔をするんだ」
意識が遠のく。

「やめろっていつてんだ！」

奴が何かわめいた。

頭が真っ白になってゆく。

ああ、あれは何だろう。奴の顔の向こうに、母の顔がみえた。とても怖い顔だ。呪われた表情だ。子供と手をつないでいる。子供はこちらを見て言った。

「ほらね、母上はちゃんと来たでしょう？」

説き伏せるような口調は、嫌いだ。

全身の力が抜けて、意識が飛んだのがわかった。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
乱文、失礼いたしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451p/>

きのう見た夢

2010年12月17日06時48分発行